

共感について考える

神藤 貴昭(本学教職研究科教授 教育心理学)

今年の夏も、集中豪雨等、日本全国で自然災害が起きている。地震や噴火などのように、季節にかかわらず起きる自然災害もある。日本に住むわれわれは自然災害とともに生き、また発展してきたといっただろう。

自身の経験を言うと、もう28年以上も前の、1995年1月17日に、神戸市灘区で、阪神淡路大震災に遭遇した。震度7の揺れは大変なもので、家の壁は割れたし、部屋の中はめちゃくちゃになった。斜め向かいのビルは倒壊し、近所の大きな商店街も、ほとんどの店が倒壊した。火事もあちこちで起こっていて、みな、なすすべがなかった。関西に地震は起きないという神話は脆くも崩れた。

私は、神戸大学の4年生だったが、同じ研究室で、一緒に卒論を書いていた同級生が、下宿で亡くなった。地震発生は卒論提出3日前であった。皆で、亡くなった友人の卒論の続きを仕上げ、製本した。その様子はNHKで全国放送もされた。さらに、「その後」ということで、20年後の2015年にも取材がきて、NHK神戸放送局より兵庫県のみで放送されたい(立命館の衣笠にあった研究室までカメラが来られ、乱雑な研究室も放映された…)。

さて、地震発生後、すぐ、アルバイト先のボランティア活動として、避難所巡回カウンセリング(臨床心理士会の活動。いまだに臨床心理士資格は持っていないが…)をすることとなり、私もこれについて行った。神戸市灘区、東灘区、芦屋市、西宮市あたりを回ったが、神戸や阪神間在住で、自身も被災したカウンセラーと、被災者たちは、みな、運命共同体のように「共感」できていたように見えた。私も、その一員のようにであった。

他方で、東京など遠方から応援にきてくれたカウンセラーは、なかなか、苦戦していたようにみえた。私自身も「東京からきても、わからんやろな」と思っていた。

しかしながら、粘り強く被災者の声を聴かれたり、あ

るいは、身の回りのちょっとしたことを援助したりすることで、だんだんと、被災者のほうも(その一人である私も)、「わざわざ東京からきてくれた」「自分たちのことを思ってくれている」「共感しようとしてくれている」という気持ちが変わってきたのではないかと思う。

カウンセリングにおけるカウンセラーの態度として、「共感」の重要性がいわれる。また、これと関連して、教師ももつべき「カウンセリングマインド」として「共感」があげられることが多い。

「共感」は「同情」とは異なり、相手の気持ちと同じ気持ちになる、ということであるが、これは難しいことである。自分と違うから「他者」なのである。何かに苦しんでいるとき、簡単に「共感しました」と言われても、ちょっと腹が立つのではないか。といって、「全然共感できない」と言われたら、もっと腹が立つだろう。

カウンセラーが、共感できていると過剰に感じている場合は、実は客観的に自身をみることでできていないのだ、という指摘もある。それでも「共感できた」という瞬間があることも事実である。

このように、「共感」とはなかなか難しい問題だな、と、避難所巡回について行った大学4年生の私は思い、「共感しようというプロセスが大事なのかもしれない。漸近線のように近づいていく運動が共感なのかもしれない」などと考えたものである。だがよく考えると、共感とは、相手の心の方も固定ではなく動く、相互作用のプロセスであり、漸近線というメタファーも使い難い。

さらに言うと、「共感」だけではなく、教育心理等で扱われる「情緒的サポート」「寄り添い」「対話」などの対人的諸概念は、上記と同じような特徴をもつだろう。手をつかめると思ったら、逃げていき、無理だろうと思ったら、手の中に向こうから入ってくる。夏の夜にホテルと戯れているように。そんなことを繰り返しながら、いつか「共感」という瞬間が訪れるのかもしれない。